

言語と社会

—初級日本語教科書の中の場面分析—

等々力啓

(信州大学人文学部 4 年日本語教育学専攻)

1. はじめに

J. V. ネウストプニー氏の『新しい日本語教育のために』を読んで新しい日本語教育ということに興味を持った。

そこで、場面シラバスを中心に作成された日本語教科書の構成を分析することで、教科書がどれくらい新しい方法に適した教材になっているか考察したい。

2. 先行研究

『新しい日本語教育のために』(J. V. ネウストプニー, 1995, 大修館書店)を要約する。本書は全 10 章からなる。

第 1 章では、現在日本語が国際社会で重要になったことで、日本語教育も変わっていかねばならないと述べ、インターアクション教育が必要だとしている。

インターアクションとは外国人、日本人間の相互行動である。インターアクションを成立させるためには「言語能力」「社会言語能力」「社会文化能力」の 3 つの能力が必要だとする。かつて日本語教育は「言語能力」つまり文法を教える言語教育に偏っていたが、文法を使いこなすためには文法外のコミュニケーションの能力が必要であり、それが「社会言語能力」である。「社会文化能力」とはコミュニケーションを成立させるにはさらに、コミュニケーションとは直接関係しないが、社会の規範などが必要だというものである。

インターアクション教育は 3 つにわけることができる。「社会文化能力」を教える「ジャパン・リテラシー 1」のための教育、「社会文化能力」と「社会言語能力」を教える「ジャパン・リテラシー 2」のための教育、さらに「言語能力」も加えた「ジャパン・リテラシー 3」のための教育、である。学習者のニーズによって、教授法もこのように区別する必要がある。

インターアクション教育の方法としては、不適切さのあるときに問題を解決するための「アクティビティー」によって行なわれる。大きく分けて、解釈、練習、実際使用

のアクティビティーによって、構成される。実際使用のアクティビティーとは、インターアクションの場面を直接教育過程に取り入れることである。教室にとどまらず、ビジターを案内させたり、日本へ旅行したりなど多くのアクティビティーを行なうことができる。

第2章では、「社会文化能力」の必要性を述べている。

「言語」は「文化」と対比させられてきたが、「文化」の中には、二種類の現象があり、文法外のコミュニケーションルール(社会言語能力)もう一つが、「実質」的行動、つまり「社会文化能力」である。「社会文化能力」は、ときにコミュニケーション行動の話題になり、コミュニケーション行動と同じ場面でまじることも多く、すべてのコミュニケーション行動が実質行動から出発するので、日本語教育で扱うべきとある。

第3章では、コミュニケーション行動について論じている。

社会文化行動は日本と外国でそれほど違わないが、表現されるコミュニケーション行動は大きく違うので、どうやって日本人の言葉の真相の意味を読み取り、意思を効果的に伝達するかなどを教えなければならない。またコミュニケーションとは日本の中でも地方差、階層差などが存在するので、これも学習者の環境によって教えなければならない。

第4章では、イマーション・プログラムについて紹介している。

イマーション・プログラムとは、日本語による日本語以外の科目の授業に浸りきるというプログラムである。イマーションを日本語の「実際使用」のアクティビティーにするには、学習者が本当のインターアクションだと感じなければならない。そのためになぜそのような学習をする必要があるかと説明し、納得させる必要がある。

第5章は、日本語教育におけるテストの問題に言及している。

問題は、「言語能力」をテストすることは容易だが、「社会言語能力」「社会文化能力」をテストすることが難しい点である。現在はその方法が確立できていないので対策が必要である。社会文化能力がテストがはずされている現在のテストは、文法を多く学習する学生が有利になってしまい、奨学金のための競争に文化をより学習した生徒は不利だという現象が起こってしまう。インターアクション能力をテストするのは、日本語テストに関するワークショップを行っているような小人数のグループなどによって一般的な意識の向上は可能になるのではないか。

第6章では、日本語の教師の育成について述べている。

教師の育成は、「学習」によってだけでなく、無意識のうちの「習得」が大きな影響を及ぼす。

第7章は、日本語教育を伝統的な教室場面から解放し、「実際使用」のアクティビティーにするのにティーチング・アシスタントが効果的であることを述べている。

第8章は、接触場面について触れている。

日本語母語話者同士の会話(母語場面)と、日本人と外国人の会話(接触場面)には異なった特徴があり、母語場面ではなく接触場面を教える必要がある。

第9章は、外国人とのコミュニケーションの際に起こる問題点をあげている。

第10章は、ストラテジーについて説明している。習得が、教師側だけでなく生徒の管理下にあることもあるということを述べ、それを学習者ストラテジーとし、習得にとって大きな効果があると述べている。

本研究の、教科書の分析においては、主に第1章から第3章までに述べられている考え方が参考になる。日本語教育に欠かせない三つの能力の教育と接触場面を、どのように教科書が取り上げることができるかということに問題を絞りたい。

3. 日本語教科書にみられる場面リストの作成

3. 1 準備

3.1.1 教科書の選択

今回分析する教科書は、『新文化初級日本語Ⅰ・Ⅱ』である。本書は、初級日本語学習の満たすべき条件として、「第一に、文法を体系的に習得し、将来高等教育を受けるに足る高い応用力を積み上げられるような土台を作ること」「第二に、日本の生活で日々直面する場面でコミュニケーションができるようにすること」としている。これは、言語能力だけでなく、コミュニケーション能力を教えるべきだというネウストプニーの主張と一致している。またその後には、「学習者にとって文型の習得とは、抽象的な理解と機械的な練習だけを指すのではなく、実際に、それが使われるべき状況で正しく使うことができ、初めて習得したと評価されるべき」とあり、この教科書が文法一辺倒ではなくコミュニケーションにも重点をおいていることがわかる。日本語教育学会(1991)ではこのような「日常生活を営むに必要な『場面』を設定して、教材を構成」した教材を場面シラバスと呼んでいる。この教科書をネウストプニーのいう「新しい日本語教育」の考え方に近い初級教科書の一つとして、分析する。

3.1.2 リストの作成

この教科書は「生活会話」と36課の構成になっている。それぞれの課は「本文」「文型」「練習」から成り、文型は、その課で学習すべき新出文型の提示をし、練習は、短い入れ替え練習ができるようになっている。今回取り扱うのは、主に「本文」の部分である。

「本文」は、本書の説明によると、学習者が日本の生活で出会うと思われる場面や、興味を持っていると思われる場面の中で文型を提示したものである。つまり、上記の

第二の目的、コミュニケーションを教える役割がここに与えられている。ただし、本文の扱いは課によってことなり、理解中心のものなどがあると付け加えてある。

中身を見ると、ほとんどの課の1ページ目は、カラーで印刷された本文1が取り上げられていて、ここで、その課の扱う場面がだいたいわかるようになっている。調査方法としては、まず、課ごとの本文を抜きだし、それが日本語のコミュニケーション場面としてどのような要素を含んだ場面であるか、その課全体の場面設定にどうつながるかによって整理する。要素の判断基準としては、私の感覚によるところも多いが、それがむしろ固定観念抜きで純粹に資料に向き合うことにつながった点では、良かったかもしれない。日本語教育学会（1991）で場面の分類がされているが、これとは違った視点で見ることができた。

これまで場面ということばを頻繁に使ってしまっているが、場面の判断の基準に関しては、何をもって場面とするか、非常に難しかった。場面というと、日常の語でも使われるので、考える手がかりにはなるが、深く考えると不分明になる。場面とはいまひとつ曖昧な概念である。表に整理する際、本文は個々の場面といえるが、それをまとめた課ごとの場面は場面とするよりも生活の中の行動と捉えたほうがしっくりくると思い、動詞化して記述した。よって課ごとの場面はとりあえず行動という名前にした。表1がそれである。

表 1 課ごとにみられる場面

	行 動	本 文 1	本 文 2	本 文 3
第 1課				
第 2課				
第 3課				
第 4課				
第 5課	案内してもらう	伝言	道を尋ねる	店内の場所を尋ねる
第 6課	お見合いをする	一日のスケジュール	お見合いでの会話	2の続き
第 7課	交番へ届け出る	交番へ連絡する	落とし物の説明をする	落とし物が見つかる
第 8課	休日についてインタビューされる	インタビューされる	1の続き	—
第 9課	学生会館で生活する	学生会館に入る	会館の規則の説明を受ける	コインランドリーの使い方
第10課	団体旅行(観光)をする	旅行の予定の説明	観光地の移動	ホテルに着く
第11課	自己紹介をする	教室で自己紹介	家族についての作文	進路の面談を受ける
第12課	料理を作る	テレビの料理教室	—	—
第13課	生活意識調査をされる	生活意識調査のアンケート	インタビューされる	2の続き
第14課	日記を書く	日記	1と同じ	—
第15課	アパートを探す	不動産屋で話を聞く	1の続き	2の続き*注
第16課	医者にかかる	受付から、診察まで	レントゲン写真を見ての話	会計
第17課	天気の話をする	ニュースの天気予報	天気の話をする	—
第18課	食事と健康の話をする	食事と健康の話題	—	—
第19課	迷子の子供を探す	試着と、迷子の報告	迷子の案内	迷子が見つかる
第20課	卒業後の進路指導を受ける	進路面接	1と同じ	1と同じ
第21課	訪問する	訪問のマナーの例	訪問して帰るまで	—
第22課	アルバイトをする	アルバイト募集の広告例	広告先に電話する	アルバイトの説明を受ける
第23課	プレゼントする	ショーウィンドウを覗く	何を買うか相談する	誕生日にプレゼントする
第24課	贈り物をする	日本の贈り物について	バレンタインデーのインタビュー	お中元のインタビュー
第25課	電 車で人を誘う	電話で誘う	1と同じ	—
第26課	店へ問い合わせる	自・他動詞の会話例	店へ修理を頼む	—
第27課	引越しをする	部屋を見せてもらう	引越し準備の例	荷物を運ぶ
第28課	お礼をする	車で送ってもらう	お礼の話をする	食事した場所の話題
第29課	お見舞いする	見舞いに来て、帰るまで	お礼の手紙	—
第30課	人をひきあわせる	電話での呼び出し	(2・3)レストランでの食事	(4)ホテルの予約を取る
第31課	飛行機に乗る	飛行機の予約	搭乗についての説明を聞く	機内
第32課	お祭り見学をする	お祭りに行く約束をする	お祭りの感想	—
第33課	工場見学をする	工場の案内	1の続き	—
第34課	娘についてインタビューされる	インタビューされる	1の続き	—
第35課	講演会に出る	待ちあわせ	受付を済ませて入場する	帰りの電車
第36課	クラブ活動をする	クラブ活動の話題	クラブの試合後	—

3. 2 リストの説明

3.2.1 それぞれの課にみられる場面

「本文」を参考にし、それぞれの課が使っている場面というものを考えた。教科書の説明では、課は文型の使われる場面をストーリーにしたもの、としているが、例外も多く、ここでは、それらも含めて課が扱っている場面と考える。

「本文」は、課の場面の中に含まれる個々の場面として下位分類されるものであると考える。次に、それぞれの課の場面について述べる。

3.2.2 第1課～第4課

表には、第4課までは、空欄にしてある。これは、本文が、場面を設定させないものであったからである。1課では日時の紹介、2課・3課は、物の所有を聞いたり、4課では、本文がなく、形容詞の例をあげるにとどまっている。これは本書でも説明してある、課によって異なる部分だと考え、場面の扱いからははずした。また、第1課の前に、「生活会話」という項があり、あいさつの例や、数の数え方、日本のお金などを紹介していることから、はじめの数課は、基礎的な知識の学習に重点を置いているのだと考えられる。

3.2.3 第5課以降

実質場面を取り上げているのは、第5課からだといえる。第5課は、案内の場面とした。本文1は、妻の伝言を夫が読んでいる場面で、やや理解に苦しむが、物のありかという意味で、案内と考えた。

第6課は、本文の前に、動詞の例から入っている。同じことは第4課の形容詞にも見られる。その後の本文は、1が一日の予定表で、2・3が会話である。2と3の場面は、フォーマルな印象があるためお見合いではないかと思うが、事実は書かれていないのでわからない。

第7課は、本文の1から3までで、一つのストーリーをなしており、出発点から、ゴールまでが取り上げられている。この場合なら、財布を落としてしまった場合に、どうすればいいのか。警察に行き、事情を説明し、財布が見つかるまでの過程がわかるようになっている。学習者が、もしこのような事態になった場合に、きちんと対応させることができるのである。このような取り上げ方は、ニューストプニーのいう、社会言語能力と、文化を教えること、つまり社会文化能力の両方の要素を含んでいるといえそうである。事態の收拾のための方法(「警察に行き、」からの流れ)は、社会文化のカテゴリー、その場でのコミュニケーション(実際の説明の仕方など)は、社会言語のカテゴリーだと考えるからである。

第8課は、テレビの中で、記者が旅行者に旅行の感想などをインタビューする場面で、構成されている。社会文化的な要素としては、休暇の過ごし方の情報が考えられるが、場面はインタビューである。これは、話題として考えることもできる。

第9課は、留学生が、学生会館に着いたところ(本文1)、規則の説明(本文2)、コインランドリーの使い方を聞く場面となっている。これは、学習者が直面するであろう場面を取り上げ、情報をもつめこんでいる。ストーリーをなしているわけではないので、学生会館の生活の場面とした。

第10課は、第7課のように一連のストーリーをなしている。この場合は、団体旅行をする時の一連の場面である。

第11課は、教室での自己紹介からはじまり、家族の紹介を作文で書くこと、面接にて自分の意見を話す場面と、取り上げられている。それも自分のことを説明する、自己紹介の範囲に含んでいるのだと考える。

第12課は、テレビでよく見られる料理教室の場面である。関連のあるものとして、料理のことばや、動詞なども紹介されている。

第13課は、留生意識調査と題されたアンケートと、生活環境について尋ねるインタビューが、本文の2と3で取り上げられている。共通点は、生活意識調査である。これも場面というよりは、話題と言ったほうがしっくりくる。しかし、あくまでインタビューされる場面と言ってしまうので、話題とはしておかなかった。

第14課は、本文1・2とも日記である。旅行中の日記で、本文1の、次の日の日記が本文2となっている。日記の内容からは、旅行のことや、旅行先(この場合植物園など)の知識もわずかながら読み取ることができる。

第15課は、7課などと同じく、日本語教育にとって大きな意味を持つと思われる。留学生がアパートを探すとき、不動産屋とのやりとりが詳しく取り上げられていてとても便利である。本文が4までであるのは、この課のみなので、表には項目をたてなかったが、注となっているのは、4を含むという意味である。1～4まで同じ状況でストーリーをなしている。

第16課は、病院の受付から、診察、帰りの処方箋の説明までの場面が取り上げられ、その場合になった学習者のすべきことが、よくわかるようになっている。また、からだの名称や、病気の症状などの例もここであげられている。

第17課は、本文1は、天気予報のニュースについてアナウンサーが話す場面、本文2は、ドライブの誘いの電話だが、内容は天気予報の話題が含まれている。本文1は、よく目にする天気予報のニュースについての知識を与えることができるし、2によって話題にすることもできる。天気予報という一般的知識の周辺にまつわる場面、とでも言うべき構成になっている。

第18課は、会社に遅刻したときの会話の場面と、昼休み食堂で朝食と健康についての話題で話をしている場面が本文1に含まれている。これを一つの場面と捉えるのが難しく、食事と健康の話題とした。

第19課は、本文1で、母親が洋服の試着をるところから、子供がいなくなるという場面で、本文の2と3でそこからの対処の場面と続いている。これも出発点から、ゴールまでのストーリーをなしていることから、迷子について取り上げているのだと考えられるが、はじめに試着の場面をとりあげているのは、意図的で、周辺の場面としての情報という意味合いを持っているのかもしれない。

第20課は、進路指導を受けている場面だが、進路の話題といえなくもない。むしろそちらを意識して、取り上げていると考える。本文は3までであるが、どれも進路指導の場面の一つに位置付けられる。

第21課は、訪問とタイトルにある通りである。本文1は、訪問のマナーの細かい説明を、本文2では、実際に訪問する場面を取り上げている。コミュニケーションよりも、規範についてに焦点が当てられている。

第22課は、本文1は、現実でありそうなアルバイト募集広告の例をあげている。本文2は、広告を見て、実際に連絡先に電話をかける場面、本文3は、アルバイトをはじめの時の説明を受ける場面、ただし、この場面で知識として得られるものは、休憩室についてくらいである。その他のバイトの実際の場面は取り上げられていない。

第23課は、プレゼントをする場面とした。本文1で、ショーウィンドウで品物を見て、本文2は、どんなものをプレゼントするか友達と相談し、本文3で、実際にあげる場面となっている。しかし、流れとしては、間違いないのだが、実際に教える場面としては、疑問である。文法以外の面である社会言語的・社会文化的な面においては、内容として欠けていると感じる。

第24課は、贈り物について取り上げられている。本文1は、場面ではなく、日本人の贈り物の習慣についての説明である。本文2は、バレンタインデーでのインタビュー、本文3は、お中元についてのインタビューである。どれも学習者が直面する場面ではない。その点は、第8課の休日についてと同じである。テーマについての情報を与えるものとして課を構成しているのだろう。

第25課は、本文1も2も電話で人を誘う場面である。

第26課もまた、複雑な構成をしている。形容詞、動詞と同じく、本文の前に、自動詞と他動詞という項をもうけて、例を羅列している。本文1を見ると、〈会話〉という小さな会話文が6つ紹介されている。これらは、場면을重視したのではなく、自動詞、他動詞の使われる文型に焦点を当てている。本文2は、電気店で故障しているのかどうか見てもらう場面である。これは、実際の場面を考えている。

第27課は、引越しの手順について、本文1から3までストーリーになっている。本文1は、不動産屋とアパートを見て、決める場面で、本文2は、引越し準備と題され、引越しの際の準備についてのリスト、本文3で、引越し当日、引越しサービスの社員が来る場面となっている。一連のストーリーになっている一つである。

第28課は、本文1で、車で送ってもらう別れ際の場面、本文2では、そのお礼をするという話題、本文3は、連れていってもらった場所の話題である。日常生活としてのストーリーにはなっているが、本文3は、お礼の話題とは離れてしまっている。しかし、本筋は、何かをしてもらいお礼をする場面だろうと考えた。

第29課は、お見舞いについて取り上げている。本文1は、病室にお見舞いに来た場面、本文2は、それに対してのお礼の手紙の紹介である。

第30課は、本文1が、電話で在宅か聞く場面、本文2が、人をひきあわせて食事に行く場面である。そのあと、本文3は、食事の場面と別れのあいさつの場面で、本文4がホテルに予約を取る場面である。本文のどれもを重視すると、食事や、ホテルの予約の場面という関係のなさそうな場面が含まれていることになってしまう。日常生活のストーリーとすれば、ひきあわせる中で食事に入ったのだから、食事という場面があってもよいだろう。しかし、本文4では、それまでに参加していない人物が突然出てきているので、どう解釈すればよいのかわからなかった。

第31課は、飛行機に乗る場面とした。それにまつわる行動、本文1で、飛行機の予約を取り、飛行場への行き方までを聞き、本文2で、搭乗の際の注意点などを聞き、本文3で、機内で、というようになっている。機内の場面は、コミュニケーション場面というよりは、座席のベルトのことなど機内の情報を重視している。

第32課は、本文1が、お祭り見物に行こうと話す場面、本文2は、お祭りを見に行った感想を聞く場面となっている。

第33課は、本文1、2とも工場見学で案内係の女性が説明をしている場面になっている。

第34課は、本文1・2ともマラソン選手の母親にマラソン選手になるまでのことをインタビューしている。この課で問題なのは、まず日常的に直面するだろう場面からはかけはずれていること、かといって他の課のインタビューの例のように日本の文化についての知識に傾いているともいえないことである。そのことからこの課は、文型を重視するためにやや無意味と思われる場面を用いたように感じられる。

第35課は、本文1が、待ち合わせの場面、本文2は、講演会の会場につき、受付をすませる場面、本文3は、帰りに今日の講演について話す場面を取り上げている。これも講演会に行く一連の場面になっている。

第36課は、クラブ活動について取り上げている。本文1は、クラブ活動の話題、本文2は、クラブに入り、試合後の場面である。

4. 考察

4. 1 リストの分析

4.1.1 リストによる本書の特徴

前章表1で教科書に取り上げられている場面を抽出したが、場面の取り上げ方を見ると、日本にくる学習者が直面する場面での具体的なコミュニケーションや知ってお

くべき文化的知識が、かなり深いところまで詳しくしかも分かりやすく取り上げられているといえる。

しかし、上記のリストで、「日本の生活で日々直面する場面」の種類が十分かどうかは別である。もちろん種々の細かい場면을あげればきりが無いが、まだ欲しい場面はありそうである。

4.1.2 ネウストプニーの論点

ここで、もう一度『新しい日本語教育のために』に戻ると、

a 言語教育、社会文教育、社会言語教育のすべてが、日本語教育には必要である。

b 取り上げる場面は、「母語場面」ではなく「接触場面」でなければならない。

ということをネウストプニーは主張し、それらのための方法について論じている。そしてその一つとして、伝統的な教室を離れることがあげられている。教科書はその中で、教室場면을離れる前の練習や、講義などに利用できるモデルとして、役割を果たすものである。

4.1.3 論点の照合

二つの論点をリストに当てはめる。aについては、教科書の取り上げるものが言語教育、つまり文型の羅列にとどまっていはいけないことを指摘し、実際に使われる場面を取り上げることで、社会言語能力と社会文化能力を扱おうとすることができる。場面というのは、3章のはじめにも書いたが、教科書中の取り上げ方と、ネウストプニーの論を照らし合わせると、コミュニケーション能力を教えるためのもの、つまり社会言語教育の範囲にはいるものということと一致している。基本的に、文型を場面の中に提示し、教えるということは、言語教育と社会言語教育を含んでいることだといえるのである。

では、社会言語教育はどのように取り上げられているのか。ネウストプニーは社会言語教育で扱う社会言語行動を、コミュニケーションと直接関係しない実質的行動(実質行動)と定義している。実質行動がしかし、コミュニケーションするために間接的に関係する論拠として、実質行動が話題になること、実質行動とコミュニケーションが同じ場面で交わること、コミュニケーションは実質行動から出発すること、をあげている。それにより社会文化教育の必要性を主張しているのだが、これをふまえると、リストの中で、話題としたものは、この根拠に基づいているとわかる。二つめは、たとえばスポーツしたり、自転車に乗ったりする行動自身にはコミュニケーションは含まれないが、実際の場面に入れると、その前後や最中にコミュニケーション行動が伴うということである。リストの中では、第35課、講演会に出る場面の行く前にある待ち合わせなどがこれに当たるのではないかと考えられる。三つめは、たとえば第16課の場合、医者にかかるというのが実質行動で、そのために様々なコミュニケーシ

ョン場面が存在しているということになる。この場合の実質行動はネウストプニーが「具体的な実質的な目的」があるとしている。

ネウストプニーは、社会文化教育についても一つ、日本の社会や文化を知らなければコミュニケーションすることは難しいと指摘し、社会や文化の知識そのものも教える必要があるとしているので、社会文化教育は、その要素も含むと考えているのだと思われる。これは、第21課の本文1で訪問のマナーの提示をしていることにあたるのではないだろうか。

このように考えると、教科書の場面の取り上げ方は、言語教育、社会言語教育、社会文化能力のすべてを含んでいる事が望ましいといえる。しかし、含むだけではなく、体系的に、必要な要素をすべて含むものでなければならぬだろう。

4. 2 場面の分類

4.2.1 日本語教育学会の「初級教材場面分類」

必要な場면을体系的に取り上げるには、そのためのリストが必要である。場面については、先ほどもふれたが、すでに日本語教育学会(1991)によって、「初級教材場面分類」という分類が試みられている。これは、初級教科書は「場面」、中級と上級教科書を「話題」に焦点を当て、分類している。「場面」を、「中心人物を何人か登場させ、その人物をさまざまな場所に移動させ、それにとまなう行動と、そこで接触する人物との「会話」によって」構成されていることが多いとし、場所に注目している。分類表を見ると、まず大きく「私的生活」「公的生活」「外出先」「その他」「場面不明」の5つが、「第1水準場面」と名づけられ、さらに二つの下位分類がある。たとえば「私的生活」という、「第2水準場面」は、「自宅、下宿」と「アパート、寮」などに分かれ、「第3水準場面」で、「自宅、下宿」はさらに「居間、食堂」「自室、書斎」に下位分類するといった具合である。

4.2.2 「初級教材場面分類」の欠点と一場面の違い

この分類は、参考になることは確かだが、「場面」イコール「場所」ととらえているようなふしがある。確かに、場所は、場面を生成するが、あくまでも場面は場面であり、場所ではないと考える。たとえば生活の中で考えられる「場面」のすべてを集めようとする時には、地図を使って、そこに載っている施設などをすべて抜き出すことで、可能になるのではないかと考えた。しかし、実際にやってみると、施設は、それらを利用する場面と、その中で働く場面とが存在することがわかった。場面は場所そのものではなく、そこで自分がどの立場にいるか、何をするかでまったく違った場面になるのである。もう一つの欠点は、場所の特定ができない、会話の場面などもあ

る。また、分類表では「路上」としているが、その判断が都合のいいものだと、当書も認めている。

今回の調査資料では、「待ち合わせの場面」などがそれである。たとえば実質行動「映画を見に行く」は、映画館での場面のみを扱えば、「待ち合わせ」は含まれないが、「友達と映画に行く」とすれば、映画館のみの場面を扱えばいいのではなく、当然その中の場面には、待ち合わせが含まれるだろう。そのため調査資料も、「講演会に出る」課の場合は、場所（会場）に到着する前後の過程を含み、逆に「お見舞いをする」場合は、場所（病院）での場面のみが扱われていて、構造を考える上では、面倒になる。「案内を聞く」場面も「待ち合わせ」と同じ性質を持っているので、一つの課にせずに、他の課の場面の一つに加えることもできるはずである。

場所を取り上げていても、その中の場面を取り上げなければ意味がない場面には今回の資料の中では次のようなものがある。たとえば「第3水準場面」の一つに「病院」があるが、病院での場面を扱っていることは分かっても、まず病院で診察を受ける場面とお見舞いをする場面では異なるし、診察を受ける場面の中でも、医者に見てもらふ場面だけと、受けつけや会計の場面も扱っているのでは教科書の効果は大きく変わってくるのである。

4.2.3 結論—リストの分類—

先ほどあげた分類表は、初級を「場面」、中級・上級を「話題」ととらえて分類していたが、調査資料にはいくつか「話題」とするような課があった。おそらく、初級の教科書も「場面」と「話題」を区別するなら、両方が取り上げられているのだろう。

何かを話題にすることは、日々直面するであろう場面の一つである。よって私は、「話題にする場面」と考え、場面の中の一分類として位置付けてもよいのではないかと考える。これを一つの分類とすれば、「施設を利用する場面」と区別できる。

調査資料のリストを参考にし、今まで考えてきたことをまとめて、4つの分類を考えた。

- (1) サービスを利用する場面
- (2) 行動の過程の場面
- (3) 何か話題にする場面
- (4) マナーを含む文化の常識が必要な場面

これらはすべて、実質行動という目的のための場面である。この場合は、表1で場面とある大きな場面の分類として考えた。「本文」で扱う場面はその課の場面の中に含まれる個々の場面といえるが、さらに分類できるかはわからなかった。

4つの分類にニュースプニーのいう3つの要素を当てはめると、言語行動はもちろんすべてに、社会言語教育は主に(1)と(2)、社会文化教育は主に(3)と(4)で扱われるものであろう。

調査資料をこれに当てはめて整理したものが、次の表2である。なお、話題は本文が話題をしていなくても課を通して話題としているものも含めた。

表2 場面の接触による分類

分類	課	場面
1	第7課 第15課 第16課 第19課 第26課 第27課 第31課	交番へ届け出る アパートを探す 医者にかかる 迷子の子供を探す 店へ問い合わせる 引越しをする 飛行機に乗る
2	第5課 第25課	案内してもらう 電話で人を誘う
3	第8課 第13課 第17課 第18課 第20課 第32課 第33課 第34課 第36課	休日についてインタビューされる 日本での生活の話題をする 天気の話をする 食事と健康の話題をする 卒業後の進路指導を受ける お祭り見学をする 工場見学をする 娘についてインタビューされる クラブ活動をする
4	第6課 第9課 第10課 第11課 第12課 第14課 第21課 第22課 第23課 第24課 第28課 第29課 第30課 第35課	お見合いをする 学生会館で生活する 団体旅行(観光)をする 自己紹介をする 料理を作る 日記を書く 訪問する アルバイトをする プレゼントする 贈り物をする お礼をする お見舞いする 人をひきあわせる 講演会に出る

4. 3 リストの検証

第10課は、観光会社のツアーを利用しているともとれるが、ここは団体旅行での規則の方を重視していると考えこちらにし、第33課だけは、なぜ工場見学場面が必要なかわからなかったのもので、何かを話題にする場面とした。

しかし、4つの分類で、とりあえず資料中で取り上げられた場面は、なんとか説明できそうである。この分類をもとに場面のリストを作る。

(1)は、「初級教材場面分類」が取り上げた、場所に注目する場面が含まれる。施設があれば、それを利用する場面が存在するということである。非常に多くの場面が存在するが、そのすべてを教科書に載せることなど到底できない。初級の教科書は、基本的な、特に重要だと思われる場面を取り上げるべきなので、それで絞ってみた場면을以下にあげる。

- ・美容室などで髪を切る

日常生活の範囲内で、利用されるはずである。

- ・銭湯・温泉など公衆浴場に入る

公衆浴場でなくとも、公衆性のあるものには、マナーがつきものである。施設等の利用はマナーもしくは規則を含むので、(4)と混同するかもしれないが、(4)は施設などを含まないしきたりなどとして区別する。また温泉は日本の文化で代表的な一つだといっていると感じる。

- ・バス・タクシーにのる

飛行機に乗る場面は、取り上げられているが、他の交通機関、特に良く使う車類は取り上げられていない。しかし、タクシー・バスなどは飛行機に近い場面だとは言いがたい。

- ・歌舞伎・演劇などを見る

映画など見世物全般の中から一つの場面は入れるべきではないか。

- ・銀行や郵便局を利用する

金銭面は、実生活で非常に大事である。書類を書いて提出し、処理がすむまで待つ場面などを載せたらいいのではないか。

(2)を考えるのが一番難しいかもしれない。実質行動を「目的」とするならば、この分類は、「目的」そのものではなく、その過程にある場面である。現実の生活を考えること以外、これをリスト化する適切な方法が、わからなかった。この分野は、もっと追及していかなければならない。

(3)と(4)は、すなわち日本の社会や文化をあげれば、取り出すことができる。日本の社会・文化を整理するためのモデルが必要だが、『日本を知る事典』などが参考になるのではないかとと思われる。本書は、「広く生活の全般にわたって、多くの重要

な問題を展開させてみた」としている。12章のタイトルは、Ⅰ人の一生、Ⅱ家族と社会、Ⅲ職業、Ⅳ住まいと家具、Ⅴ生活と知恵、Ⅵ季節と年中行事、Ⅶ信仰、Ⅷ芸能と遊戯、Ⅷことばと表現、Ⅸ日本人のこころ、その下に具体的な事柄が数多く取り上げられている。このような知識が、真に文化を理解するためには、必要だと思われる。ただ、マナーという観点はこれでも網羅できないだろう。しかし、直接コミュニケーション行動に関係するのは、マナー、しきたりの方であり、これは詳細に取り上げるべきである。第21課が、訪問の際のルールが事細かに、文化の教養の少ない人にもわかるように1から説明してあるのは、学習者のレベルを問わない良い例である。マナーについては、『図解マナー講座』を参考にしたが、冠婚葬祭に関するマナーが特に多いようである。本書には「同僚から好感を持たれるエチケットとマナー」という項もあり、このようなものは実際にはかなり重要な文化的事実ではあるので、『日本を知る事典』では網羅できない部分があるという根拠になると考える。以下にマナーや文化面で必要だと思われる場面をあげる。

- ・パーティーや結婚式に出る

飲み物をこぼして他人の服を汚してしまった時などに、自分で処理せずボーイを呼ぶことや乾杯のこと(両者とも『図解マナー講座』による)など付け加えた方が良いと思われる。パーティーの種類や、服装なども当然含むべきである。

- ・スポーツを実際にする

スポーツを実際にする場面にはもちろんコミュニケーションがつきまとう。日本の特有のものはないかもしれないが、代表として一つは載せてもいいのではないかな。

- ・ボランティアをする

ボランティアは日本特有ではないが、思想、実際の行動は違うはずである。

- ・新年を祝う

行事については、第1課において絵でのみ紹介されている。具体的な場面を取り上げる必要はないとあえてとりあげなかったのかもしれない。ただ祭りと同じく大きなイベントであることは間違いない。

- ・動物園、水族館へ行く

これは、名詞の紹介の場面で、実際の名称を取り上げるきっかけとして使えるのではないかと考えた。生物の名詞については、取り上げられていない理由が気になる。

これらは、程度の差はあるが、どれも日常生活からかけ離れたものではない。しかし、多くの日本人の行動から、重要なものを選ぶのは、感覚に頼るところも多く、体系的にまとめるためのモデルが必要である。ネウストプニーのいう、「日常生活から離れた場面を想定されても理解には至らない」ことを考えるなら、やはり、間違いなく学習者が直面するだろう場面を設定した方が良いに違いない。銀行や郵便局の場面

は日本での日本語教育の場合、関係の深いものになるので、外国での日本語教育と、日本での日本語教育では、場面設定に大きな違いがあるといえる。

4. 4 「接触場面」について

上記で、ネウストプニーの論点の a における適合性を調べ、足りない場面も存在することを述べた。しかし、まだ b の「接触場面」という問題が残っている。ひとことで言うなら、この教科書において「接触場面」という概念は、ほとんどまったく考慮されていない。資料中の場面は、留学生の学習者という登場人物は出てくるものの、日本の規範を取り上げているという点で、「母語場面」と何ら変わりがないのである。ネウストプニーのいう「接触場面」の特徴である二点、外国人が意識的に発話を変えることや、母語話者が意識的に発話を変えること（たとえばフォリナー・トーク）については取り上げられていない。今回の資料分析は、まさに a を対象としたものであり、言語能力、社会言語能力、社会文化能力にわたって教育することは、考慮されているが、「母語場面」の具体例をあげるにとどまっているのである。しかし、感覚的に考えれば、この場面の取り上げ方は、仕方のないことで、「接触場面」を扱う教材を作ることは非常に難しいと感じる。

5. まとめ

この教科書中には、ネウストプニーの新しい日本語教育という考え方が、「母語場面」においては、かなり反映されている。しかし、「場面」を過不足なく体系的に取り上げたシラバスになっているとは言えない。また、「日本の生活で日々直面する場面」と「文法を体系的に習得させること」の関係が複雑になっているという側面ある。

第 1 課～第 4 課を場面設定できなかったのは、あえて場面を設定せずに作ったからだと思われるが、しかしそれらを場面設定の中で教えることも可能である。第 3 3 課「工場見学をする」と第 3 4 課「娘についてインタビューされる」という場面を位置付けるのが難しかったのは、文法のために作ったやや強引な場面であったせいではないかとも考えられる。まだ「文法」のための「場面」ではなく、まず先に「場面」を考えてシラバスを組む、という態度が必要であろう。まず場面をより重視してそこに体系性を持たせ、その中に文法・常識などの知識を埋めこむという方法を用いることが重要である。

【参考文献】

J・V・ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店

J・V・ネウストプニー(1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波書店

J・V・ネウストプニー(2000)『今日と明日の日本語教育』アルク
日本語教育学会編(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社
『図解マナー講座』(1985)三公社
『日本を知る事典』(1971)社会思想社

【調査資料】

『新文化初級日本語Ⅰ』(2000)凡人社
『新文化初級日本語Ⅱ』(2000)凡人社

【付記】 本論文は平成14年1月に信州大学人文学部に提出した卒業論文をもとに、
加筆・修正したものである。